第七回シンポジウムの開催にあたって

中国第一歴史檔案館副館長　鄒　愛　蓮

十月のこのさわやかな季節に、第七回中国・琉球交渉史に関するシンポジウムに参加するため、私たち一行八名は沖縄にまいりました。まず中国第一歴史檔案館邢永福館長、中国第一歴史檔案館の全職員を代表し、シンポジウムの成功を祈念して、皆様にごあいさつ申し上げます。

中国第一歴史檔案館と日本国沖縄県教育委員会は一九九一年三月に相互交流協力の覚え書きを締結し、続いて一九九八年十二月には学術交流の協議書を締結しました。今日まで双方の協力関係はすでに十三年になります。この十三年来、私たちは中琉歴史関係の研究・討論を主題とし、清代中琉関係檔案の発掘を目的とし、ともに友好的に協力、努力してまいりました。また檔案史料の出版、学術討論会の開催、展覧会の開催、研究者の交流等を通して、中琉歴史関係の研究とその進展を促進し、相互の友好を深め、大きな成果をおさめてまいりました。

私たちは今回も含め、すでに七回のシンポジウムを共催し、日中双方の研究者が四十余篇の論文を発表しています。学術シンポジウムの開催は、中琉関係史の研究の範囲をたえず拡大し、課題を常に深めてきており、毎回のシンポジウムにおいては、それぞれが自分の意見を述べ、お互いに切磋琢磨してまいりました。たとえば明清両朝の

琉球に対する冊封制度から明清以前の中琉関係の構築、中琉両国間の貿易往来から双方の文化交流と伝播、各種の海上での遭難救助から中琉関係がアジアの国際関係に与えた影響、冊封使・進貢使から官生・勤学生というように広範囲に検討を行ってきました。

討論を通して、中琉関係史の中のいくつかの問題は比較的客観的な真実の解釈を得ることができ、中琉関係の総体的な輪郭が次第に明らかになってきました。同時に学術討論を通して、各界にも中琉歴史関係に対する理解が深まり、社会的にも次第に広く関心を集め重視されるようになりました。

十三年来、中日双方の学術研究の必要に応じ、中国第一歴史檔案館と日本国沖縄県教育委員会はそれぞれに中琉関係檔案史料集を出版しています。このうち中国第一歴史檔案館は『清代中琉関係檔案選編』・『続編』・『三編』・『四編』・『五編』および『清代琉球国王表奏文書』合わせて六冊を整理出版しました。収録した主なものは清代の宮中朱批奏摺・軍機処録副奏摺・上諭檔・照会・内閣題本・史書・起居注・黄冊および内務府移会・咨文等の檔案二千八百件余りです。これらの檔案は清朝時期の中琉両国の友好交流の真実の記録であり、中琉歴史関係を研究する上での第一次史料です。これら檔案の公開出版は、中琉関係研究の成果を豊富にし、中琉関係研究においてとって代わることのできない大きな役割を果たしています。またこれらの史料は沖縄県教育委員会から出版されている『歴代宝案』とは互いに証明しあい、中琉関係史研究を大きく促進しています。現在、私たちは清代の外務部と宮中朱批等の檔案の中から清末の台湾事件と琉球案に関する史料を整理しており、さらに清代宮中の絵地図の中にある琉球に関係するものについても調査研究を進めています。なお整理作業の終了後には、それぞれ出版する予定です。

しかしながら、関連の檔案史料を探し出すことはだんだん難しくなり、その数量もだんだん少なくなっており、

新史料のつきる時期が必ず来ることになるでしょう。今後、協力をどのように進めていくかについて、私たちは一応の考えをもっています。中琉歴史関係の研究討論はたいへんに大きな課題であり、明らかな記載のある中国の隋朝からはじめると、中琉両国の交流はすでに一千三百年余り、明朝に中琉の冊封・朝貢関係がはじまってから数えても、すでに五百年余りに及んでいます。このような長い歴史を有する中、私たちがここ十数年の討論ですぐにすべての歴史的問題を明らかにするのは不可能です。また私たちは出版した新史料からすでに多くの問題を解決してきたとはいえ、なおいくつかの問題についてはまだ詳しい理解はできていませんし、史料の内容に対してもすべて深く研究しつくしているわけではありません。したがって、今後私たちは新史料を継続して発掘するということを基本姿勢として、すでにある史料をさらに詳細に具体的に紹介し、いろいろなかたちの協力を通して中琉関係史の研究をさらに進展させたいと考えています。二〇〇三年十二月、私たち双方が締結した協力交流の協議書が有効期限を迎えます。私たちは檔案史料をさらに発掘することを基本として、中日の学術交流を促進し、双方の友好を深め、継続して協力を展開させていきたいと希望しております。

さて、このシンポジウムに中国第一歴史檔案館は六篇の論文を提出しました。発表者には第二回のシンポジウムから討論に参加している朱淑媛女史、シンポジウムへの参加は三回以上となる私、鄒愛蓮と呉元豊氏、初めての論文発表となる呂小鮮氏、雁旭氏、陳宜耘女史がおります。中琉歴史関係の研究・討論の列に加わった時期は、皆それぞれ異なりますが、今回の論文を一生懸命準備してきました。皆このシンポジウムの機会を借り、日本の研究者との交流・討論を通して、切磋琢磨して長短相補いながら、一歩ずつ研究の成果を高めたいと希望しております。

最後に、本シンポジウムが私たち皆の努力のもと、多大な成果をおさめますよう祈念申し上げ、ごあいさつとい

たします。

二〇〇三年十月十八日